2025年2月16日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

見出された喜びに

［マタイによる福音書13章44～50節］

「天の国は次のようにたとえられる。畑に宝が隠されている。見つけた人は、そのまま隠しておき、喜びながら帰り、持ち物をすっかり売り払って、その畑を買う。また、天の国は次のようにたとえられる。商人が良い真珠を探している。高価な真珠を一つ見つけると、出かけて行って持ち物をすっかり売り払い、それを買う。また、天の国は次のようにたとえられる。網が湖に投げ降ろされ、いろいろな魚を集める。網がいっぱいになると、人々は岸に引き上げ、座って、良いものは器に入れ、悪いものは投げ捨てる。世の終わりにもそうなる。天使たちが来て、正しい人々の中にいる悪い者どもをより分け、お燃え盛る炉の中に投げ込むのである。悪い者どもは、そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。」

[1]　宝と高価な真珠を見出した者

　今日の聖書箇所は、イエス様のたとえ話の一つです。そして、どちらかと言うと単純なお話かと思います。しかし、改めて読むと、これは大変慰めに満ちたイエス様のたとえ話であるな、と思いました。

　44節の畑の中に宝を見つけ出した者と、45節からの高価な真珠を探し当てた人は、どちらも共通していることは、自分なりのきちんとした手続きを踏んでいるということです。つまり、見つけた宝や真珠を盗んではいませんね。いや、それどころか、自分の持ち物をすっかり売り払って、それを買っているのです。これが、今日の聖書箇所の重要な部分だと思います。その宝を見つけたなら、これまでの自分が持っていたものが色あせて見えてしまうということ。他の人からみたら馬鹿げていると言われるかもしれないけれど、自分にとっては、これを手に入れたならば、すべてを売り払っても（犠牲にしても）惜しくはないと思えるものとの、これは、衝撃的な“出会い”です。何との出会いでしょうか？聖書が語る「福音」との出会いですね。またはイエス・キリストとの出会いと言って良いと思います。

 イエス様のたとえ話は、時々、極端に響く部分というのがあると思います。「持ち物すべてを売ってしまうなんて、さすがにそれは極端でしょう」と私たちは思ってしまいます。しかし、その点こそが、「神の国」の価値の比類のない大きさを告げているのではないでしょうか？

[2] 「本気」を与えてくれる宝

私は約1年1ヶ月前、この聖書の箇所を引き合いにして、説教を語らせて頂きました。2024年1月7日なのですが、それは前牧師・加藤享先生の告別式の礼拝をここでさせて頂いた時です。私は加藤先生のご生涯を振り返って考えた時に、この聖書の箇所が頭の中に出て来たのです。その時の宣教の一部を読ませて頂きたいと思います。

―「先ほどお読みした主イエスが語られた「天の国」の短い譬えは、畑に、思いがけない宝を見出したり、真珠の商人でもビックリするような真珠に出会ったら、自分の持ち物を全部売ってでもそれを手に入れる、という話です。分かり易いですが、ちょっと極端で激しい話だとも思います。「すっかり売り払って」というのです。そこまでしなくても、自分の持ち物を少しは確保しながらでも前に進めると思います。でも、そこの所がこの譬えの力点なのではないかと思います。「天の国」「神の国」を知らされた者は、中途半端なことは出来ないのです。いや、神の国が、イエス・キリストご自身が、私たちが今まで握りしめていたものを手離させてくれるのだと思います！「もうこれは要らないのだ！」と、「本気」にさせてくれるのです。使徒パウロもこう告白しました。フィリピの信徒への手紙では「キリスト・イエスを知る絶大な価値の故に、一切のものを損と思っている」、またガラテヤの信徒への手紙では「生きているのはもはや私ではない。キリストがわたしの内に生きておられる」と語っています。

加藤先生は健康な子供時代を過ごしていましたが、小学6年生の時に結核を患い、もう兵隊になれず深く悲しんだと仰っていました。そして北海道に疎開し、そこで敗戦を迎え、軍国主義教育が身についてしまっていた享少年は、真に変わらぬ価値は何なのかと飢え渇きました。高校時代には野球に打ち込みましたが、結核が再発して吐血、長い療養生活も余儀なくされました。そんな中で、19歳の時、東京の目白ヶ丘教会で、高価な真珠に遥かに勝るキリストという宝に出会ったのです。そして、ご自分の生涯をこの方に献げる、それこそ、この譬えに出て来る、自分のそれ迄の宝をすっかり売り払わせる促しを、そこで与えられたのだと思います。」

そして、91才で主のもとに召される加藤先生のご生涯は、「神様の本気」に本気で応えた、「本気の人」の信仰の生涯だったということをお話しさせて頂きました。先生がお聴きになったとしたらどう思われたかな、とちょっと思います。

でも、私は、本当に、それまでの自分の持ち物・価値観が、塵芥（或いは糞土）と思わせる、イエス様の福音の力がこの世には確かに隠されているのだ、ということをこのたとえ話から思います。私たち、自分にとって本当に必要なものというのは、自分の力で一生懸命探し続ける中でと言うより、思いがけない時に、思いがけない方法で出会ったと、そういうことがあるのではないでしょうか？丁度、この畑の中に宝を発見した人のように。その出会いは、神様が与えて下さるもの（聖霊のお働き）であり、また、この宝というのは、発見されるのを待っているのですね。決して派手じゃない「宝」です。むしろ土の中に眠るようにして存在しているような「宝」。どうでしょう？イエス様の十字架は、一見「神様の福音」とか「宝」とは思えないものです。しかし、この福音は、‟見出されること”を待っています。

[3] この宝を発見した人とは

そして、私は今回もう一つのことに思い至りました。この宝を見出した人や、高価な真珠を見出した人とは誰なのか、ということです。私は、それは私たちクリスチャンだと思っていました。つまり今日もこのあとご一緒に讃美したい「キリストには替えられません」と歌う私たちのことなのだと。確かにその通りで、それは凄い恵みです。しかし、それ以上に、この宝を発見した人というのは、神様ご自身であり、イエス・キリストではないかと思いました。主が、隠れていた私たちを見出して下さったのです！創世記3章にありました。主なる神様に罪を犯し、楽園を追い出されたアダムとエヴァに対して、神様は「あなたはどこにいるのか」と探されているではないですか。その神様の姿が、このたとえ話の人や真珠商人とかぶります。そして、見出したのなら、ご自分の無駄を全く考思わずに、‟すべてを売り払って”ご自分のものとして下さった人。それこそ神様であり、イエス様ではないかと。そして、このお方は、私たちに何と言って下さっているかというと「あなたは、罪深くてみすぼらしくて、無価値な者だ」というのではなくて、「わたしの目にはあなたは価高く、貴く、わたしはあなたを愛している」とおっしゃっているのです！旧約聖書・イザヤ書の43章4節ですね。神様に背を向けた私たちですよ。価値なき者です。それを「価高い存在」とみなして下さっている。なぜでしょうか。イエス様が十字架の上で、私たちのために「すべてを売り払い」、私たちをご自分のものとして買い取って下さったからです。もう、私たちはさまよって誰の所にも行く必要もないのです。何ということでしょう。私たちは、神様にとって「宝」なのです！ですから、私は今日の宣教題を、「見出された喜びに」としたのです。「見出した喜び」ではなくて、「見出された喜び」。私たち、この喜びの中に、これからも、主のもとに行く日まで歩みを進めて行きたいと思います。

13章47節以下の、魚を獲る網のたとえ話は、ある意味、神様の‟最後の審き”が語られていますが、恐れる必要はないと思います。むしろその日は、この人生の旅路の中、様々な葛藤や心の中の戦いを持ちながらも神様に寄り頼んで生きた者に対して、天のみ使いが嬉しいゴールを与えてくれる日を与えてくれることを語っているのだなと思いました。神様の愛を疑う必要はありません。お互い一人ひとりの信仰生活が守られ、支えられますように、互いに祈って進んで行きましょう。お祈り致しましょう。

主なる神様、御名を讃美します。私たちは自分自身のことをとても「宝」とは思えない時があります。自分を見つめれば見つめる程そうです。しかし、あなたは、どこまでも私たちを探し求め、そして見つけたら、大喜びして下さる神です。感謝します！あなたこそ、私たちの創造者であり、また、救い主でいて下さいます。私たちのために、命さえ投げ出して下さる本気の神様に、私たちも、欠けだらけの私たちでありますが、本気で信仰生活を送っていくことが出来ますように。その力を与えて下さい。また、お互いのために励まし、祈り続けていくことを得させて下さい。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。